

# 第 1 部

## 基調報告

## 第1部 基調報告

# 農山村の人間論的価値と阿蘇の魅力

早稲田大学教育学部教授・文学博士  
宮口侗迪

### プロフィール

1946年富山県生まれ

東京大学理学部地理学科・同大学院博士課程に学ぶ、社会地理学専攻

1975年から早稲田大学教育学部に勤務、講師・助教授を経て85年教授、現在に至る。

- ・国土審議会専門委員として第5次の全総計画「21世紀の国土のグランドデザイン」の策定に参加し、「多自然居住地域」の概念を提唱
- ・現在、自治大学校講師・総務省過疎問題懇談会委員・国土交通省地域振興アドバイザー・全国地域リーダー養成塾主任講師・農村アメニティコンクール審査委員を務める
- ・1985年以来富山市に住んで東京で働き、各地を訪れる生活を続ける
- ・著書に、『地域づくり読本』（共著、ぎょうせい）、『地域を活かすー過疎から多自然居住へー』（大明堂）、『地域づくりー創造への歩みー』（古今書院）など

### 発言要旨

#### 1. 20世紀までの日本の歩み

水田化・工業化・都市化

20世紀の終わりにようやく個性化の流れが

地域づくりの積極的な活動

国土計画における多自然居住地域の創造

#### 2. 阿蘇の牧野ー本来的に個性的な空間ー

人が生きるために自然を使ってつくられて来たわが国では貴重な風景

家畜が遊ぶ中に農のワザが見える

#### 3. 農山村の人間論的価値

自然と共生する中で生命を育む生産の場

磨き上げられてきた人のワザが都市の人の共感を呼ぶ

風景から持続的な営みが連想されるときにはあたたかさや美を感じる

農のワザを捨てれば阿蘇の価値は半減

交流の推進によって地元の人にも成長し、農とツーリズムの複合的なしくみづくりを

# 自然案内人が伝える阿蘇の草原と文化

阿蘇自然案内人協会会長  
高橋佳也

## プロフィール

1932年（昭和7年）旧満州（現中国東北地方）生まれ。

旧制中学2年の終戦後、翌年阿蘇に引き上げてくる。

高校卒業後、阿蘇の小学校に勤務後上京、再び教師となり地元の一の宮町立宮地小学校を最後に定年退職。

現在、熊本県自然公園指導員、熊本県自然ふれあい指導員等を務める。

## 報告要旨

### ○阿蘇自然案内人協会について

阿蘇自然案内人協会（阿蘇ネーチャーガイド）を昨年末に立ち上げました。

従来から阿蘇にぜひ必要な組織だと認識され、何とか早期に設立をしたいものと昨年度はじめに阿蘇振興デザインセンター坂元事務局長の呼びかけにより準備会を設けて打ち合わせを重ね、7月18日、総会において協会の正式発会が実現いたしました。一方阿蘇で全国エコツーリズム大会の9月開催が企画され、この機に会員も参加することが出来、国内における案内人協会のあり方なども学ぶ事が出来ました。阿蘇の場合、現在34名の会員がいます。国内における案内人協会としましては北海道、屋久島、沖縄などが先進地として活動しているようですが、各地の方式なども参考にしながら阿蘇の案内人のあり方についてもしっかりとした基盤作りをしなければならないと考えています。

そこで会の考え方ですが、従来の阿蘇観光のあり方として、

- 1 景観を愛でたり噴火口の様子を見学する（北外輪、南外輪、仙酔峡、ロープウェイ）
- 2 温泉めぐりをする（内牧温泉、黒川温泉、その他多数の温泉）
- 3 阿蘇の観光施設を利用する（乗馬クラブ、火山博物館、カドリードミニオン）

など多くの観光案内が考えられていますが、従来型では多くの客層に満足に行く案内が保障されているとは言い難いものがあります。例えば、

- 1 必ずしも宿泊を伴った観光ではなく駆け足のツアーという場合が多い
- 2 専門的な分野に踏み込んだ案内ではない。したがって阿蘇の本当の良さを知ってもらえない。（じっくりと阿蘇を見てもらい阿蘇に来て見てよかったと感じることを期待する）
- 3 環境保全などエコツーリズムの心に則していない。平気でちりを捨てる。草木を採ったり、草原への立ち入りを考えなしに行う。（特に車での）
- 4 体験型でなく遊興型の旅行である

とする従来型の観光のあり方から、少し安易さを越えた所で「自然案内」を実施するとい

えるものを目指すのが、阿蘇自然案内人協会なのです。即ちエコツーリズムの考え方によつた案内と言うことになります。生物とその環境（エコロジー）そして経済（エコノミー）ということの基本にしています。交通機関をフルに利用して駆け足の観光、ということだけでなく、自分の足でゆっくりと阿蘇の自然の姿を観察、鑑賞しながら納得のいくエコツアーを体験したいという要請に応える人材の確保が必要なわけです。

従って会員は専門家で無ければいけません。プロとしての認識のもとにそれなりの報酬も得、それで生活できるという人もあってよいでしょう。そして協会としては将来を見据えて今後そのような案内人の後継者育成も期待しているわけです。現在三つのコースを設定していますが、昨年は現地研修を2日に渡って実施しております。また本年3月初めには会員の現地研修を南のコースで実施する予定です。

阿蘇が1934年（昭和9年）に、国立公園として指定されてからすでに70年を経過しております。この70年の間に阿蘇の自然環境は大きな変化を遂げました。人々の暮らしが豊かになったことが皮肉にも大きな課題を抱えることになって来ました。しかし現在まだまだ清冽な湧水は阿蘇の各地に噴出しておりますし、草原には他の地域では見ることの出来ない生物が多く育まれております。この自然環境は今まで人々の生活や文化によって保持されてきたものです。即ち野焼き、採草、放牧といった千年に及ぶ農業の営みの継続が水を保ち、生物を育み、このすばらしい阿蘇の景観を創り出したのです。

そして現在観光の面からこのことを見てみますと、年間1820万人とも言われる観光客が阿蘇を訪れております。

「阿蘇の景色は素晴らしい」「野焼きを見たい」「阿蘇の水を汲んで帰りたい」「どんな植物が自生しているのか」「涅槃像という雲海に出会いたい」「そんな風景の写真を撮りたい」等々の声をよく聞きます。人々のニーズに応えつつ阿蘇地域の活性化を図り、自然を守りながら、確かに後世に繋いで行く案内人という人材育成のためにも、多くの人々のご理解と協力を賜りたいと思っています。現在は阿蘇地域振興デザインセンターに事務局を置いています。

## 阿蘇の文化について

自然または草原といったテーマで阿蘇を考えることはすでにここでも十分に議論されていることで、私のほうから言えることは、あたりまえのことですが草原の形成は文化の取得がなければ成り立たないと思います。そこで案内人の立場からは阿蘇の多くのことを学ばなければならないと考えています。